

## 最近の話題

### 新たな人獣共通感染症としてのクラミジア感染症（1）

福士秀人、オブライエン悠木子

最近、愛玩鳥などの鳥を感染源とするいわゆるオウム病に加え、他のクラミジアによる新たな伝播経路によるクラミジア性人獣共通感染症が報告されている。ヨーロッパでは、モルモットのクラミジアである *Chlamydia caviae* による市中肺炎、オーストラリアで発生した馬から人への *Chlamydia psittaci* 感染、さらに、2022年12月にはオランダで鳥類由来 *Chlamydia abortus* による市中肺炎が発生した。ここでは、このオランダで発生した *Chlamydia abortus* によるオウム病について報告した論文の概要を紹介したい（図1）。

この論文は2025年2月に *Lancet Infectious Diseases* に発表された（Ravenら, 2025）。

この *C. abortus* による市中肺炎の報告では家族4人が感染し、3人が入院したという。背景として2021年にこれまでは羊のクラミジア感染症の病原体と捉えられていた *Chlamydia abortus* とみなすべきクラミジアが野鳥に感染していることが報告されていた（Zaręba-Marchewkaら, 2021）。初発患者は鳥の糞への暴露が感染原因とされている。また、家族内での人から人への感染が考えられたという。さらに、過去の事例について検討し、鳥類由来 *Chlamydia abortus* による症例が10例見出され、10例いずれも入院し、5例が肺炎、1例が死亡していたとされている。

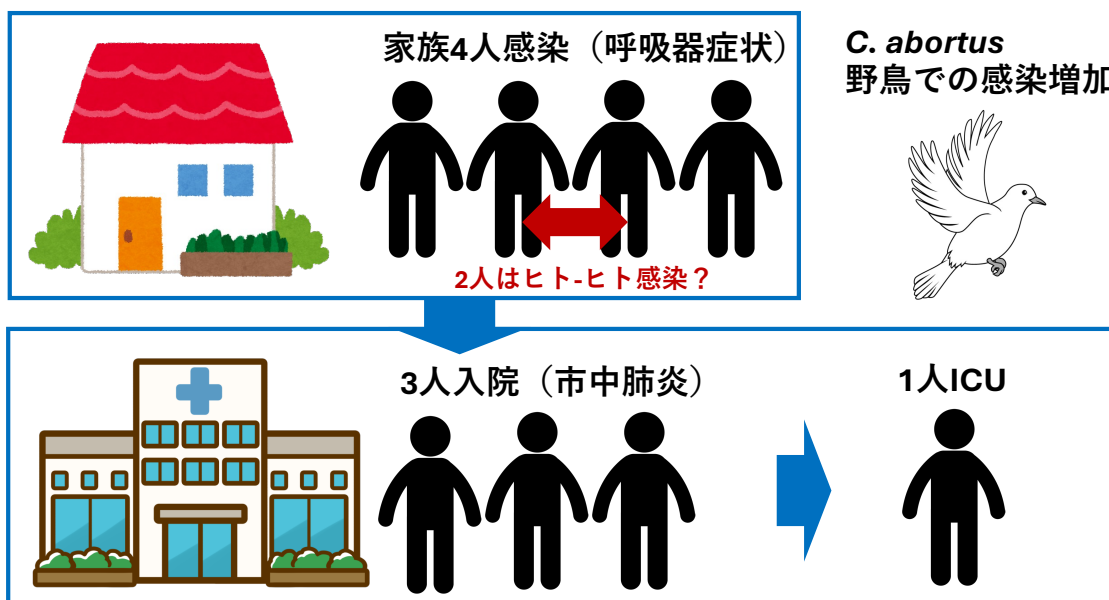
この事例で用いられた検出用PCRは *C. psittaci*, *C. abortus*, *C. caviae*, および *C. felis* を検出するとされている。今後は、原因不明の市中肺炎の診断においてクラミジア感染症を疑う場合には、この事例のように幅広いクラミジアを検出できる診断系を用いることが必要なのではないだろうか。これは動物の感染症についても当てはまることである。初動診断では、ある程度の幅広さを持つ診断系により病原体を検出し、その後、精度を高めることで適切な診断がなされるのではないだろうか。

## 参考文献

1. Raven S, Heijne M, Koomen J, Doornenbal G, Maas M, Jacobs P, Keur I, Dijkstra F, Reukers D, Platenburg M, Verweij SP, Mager HJ, Totté J, Vainio S, Bongaerts M, Heddema E. (2025) Circulation of avian *Chlamydia abortus* in the Netherlands and

community-acquired pneumonia: an outbreak investigation and retrospective cohort study. *Lancet Infect Dis.* 25(2):198-207. doi: 10.1016/S1473-3099(24)00529-2.

2. Zaręba-Marchewka K, Szymańska-Czerwińska M, Livingstone M, Longbottom D, Niemczuk K. (2021) Whole genome sequencing and comparative genome analyses of *Chlamydia abortus* strains of avian origin suggests that *Chlamydia abortus* species should be expanded to include avian and mammalian subgroups. *Pathogens.* 10:1405. doi: 10.3390/pathogens10111405.



鳥由来 *C. abortus*による市中肺炎  
(2022年オランダ/新しい感染様式) (Lancet 2025)